

神に喜ばれるわざ

ヨハネ福音書6:28-34

【新改訳2017】

- 6:28 すると、彼らはイエスに言った。「神のわざを行うためには、何をすべきでしょうか。」
 6:29 イエスは答えられた。「神が遣わした者をあなたがたが信じること、それが神のわざです。」
 6:30 それで、彼らはイエスに言った。「それでは、私たちが見てあなたを信じられるように、どんなしるしを行われるのですか。何をしてくだいませうか。」
 6:31 私たちの先祖は、荒野でマナを食べました。『神は彼らに、食べ物として天からのパンを与えられた』と書いてあるとおります。」
 6:32 それで、イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。モーセがあなたがたに天からのパンを与えたのではありません。わたしの父が、あなたがたに天からのまことのパンを与えてくださるのです。」
 6:33 神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものなのです。
 6:34 そこで、彼らはイエスに言った。「主よ、そのパンをいつも私たちにお与えください。」

【祈りながら考えよう】

- (1) 聴衆が考えている「神のわざを行う」とは、どういうことですか。
- (2) 主イエスが答えられた「神のわざ」とは、どういうことですか。
- (3) 神が与える「天からのまことのパン」とは何を指していますか。マナとどう違いますか。

【解説】

(1) 神のわざを行うとは

主イエスが、「いつまでもなくならない、永遠のいのちに至る食べ物のために働きなさい」と言われると、それを聞いていた人々は、「神のわざを行うためには、何をすべきでしょうか」と聞いた。この言葉の中に何かをすることによって神に受け入れられ、神に喜ばれるようになるのだという考え方が現れている。

しかし、聖書が一貫して教えていることは、人間が善行を積むことによって救われることはあり得ないということである。すると、「なぜ善行を積むことがいけないのか」と尋ねる人もいる。善行を積むことがいけないのではない。善行を積むことは、悪いことをするよりはるかに良い。

しかし、たとい私たちが善行だと思ひ、その動機においても純粋なつもりであっても、完全に純粋な動機で善行を積むことはできない。私たちの本性は罪のために腐っていて、自分では純粋だ、完全な善であると思っけていても、自分すら気づかずに、そこに不純なもの、利己的なものが入り込んでいる。

それほど、私たちはその本性が腐りきってしまっている。だから、私たちが行う善行など、すべてを見通しておられる神の御前には善の香りは少しもなく、臭気ふんぶんたるものにほかならない。良心が罪のために麻痺してしまっている罪人には、そのことすら分からない。

(2) 神の御子を信じることが神のわざである

ユダヤ人たちが「神のわざ」と言っているのは、「律法のあのわざ、このわざ」といったもろもろの善行のことを指している。それに対して、主はこう答えられた。

《神が遣わした者をあなたがたが信じること、それが神のわざです》(29節)

神が遣わされた御子イエス・キリストを信じることを、神がどんなに喜ばれるかということをごここで教えられている。「神のわざ」とは、神がなさるわざ、神の賜物という意味ではなく、「神が人に求めておられること、神が喜ばれること」という意味である。ただ信仰さえあればよいというのではなく、天の父である神が遣わされたお方を信じるのでなければならない。

ここで注意したいことは、信仰とは、人格への信頼ということである。私たちが神の御言葉を信じるのも、その御言葉を発せられたお方を信じることである。「キリストへの信仰、信頼」が「信仰の本質」である。

(3) 信仰の理解の進展

新約聖書の中では、信仰の理解についての進展が見られる。これは、当時の教会の事情という背景があって、信仰理解が深まっていったと考えられる。

①ヤコブの手紙が書かれた頃

「信仰が本物であるためには、善い行いをする必要がある」ということが問題となっていた。おそらくユダヤ教の信仰とキリスト教の信仰を区別するために必要なことであつたと思われる。

キリストによって生まれ変わった人は、必ず善い行いをするということが強調され、その結果として、信仰と行いが表裏一体で、切り離せないと考えた。今日においても、こういう意味での信仰理解は大切な点の1つである。信じて生まれ変わった人は、その生活が変わるということは大切な点である。

②パウロが活躍し始めた頃

その後、「善い行い」を強調する余り、「行いによる救い」を主張する人が現れた。その結果、「救いに必要な信仰」は行いではなく、信仰だけだということが強調されるようになり、人間の行いと信仰を分離させる考え方が主張されるようになった。それが、パウロの手紙の中に見られる。

今日でも、善行を積んで天国へ行けると一般に考えられているのに対して、「救われるためにはイエス・キリストを信じるだけでよいのだ」と主張することは大切なことである。パウロもヤコブと同様、「善い行い」というのは、「信仰の実」なのだと教えた。

③ヨハネ福音書が書かれた頃（一世紀の終わり頃）

善い行い（善いわざ）というのは「信仰の実」であるという信仰理解より一歩進んで、「神のわざ」とは信じることであるという信仰理解が展開された。「イエス・キリストを信じること」が、神を喜ばせる「唯一最高のわざである」という考え方である。それが、今日の個所に示されているところである。

ヨハネが示している信仰理解は、神から遣わされて来られた、御子イエス・キリストを、生涯を通して信じ続けるということの意味している。生涯を通してキリストを信じ続けることは、自分の意志や力によってできることではなく、神の恵みでしかないが、それこそ「神が本当に喜んでくださるもの」である。

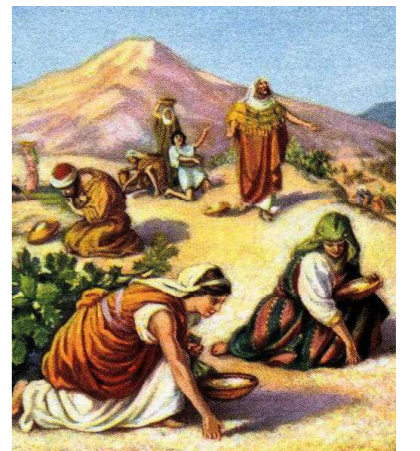
(4) しるしを要求する

主が、そのように彼らにお答えになると、彼らはこう言っている。

《それでは、私たちが見てあなたを信じられるように、どんなしるしを行われるのですか。何をしてくだいませうか。私たちの先祖は、荒野でマナを食べました。『神は彼らに、食べ物として天からのパンを与えられた』と書いてあるとおります》(30節)

彼らは、五千人以上の人々に主イエスがパンを食べさせた奇蹟を見たばかりなのに、なおも、「しるし」を要求している。

主イエスは、信じる者のうちに働いて、驚くべき奇蹟のわざをしてくださる。私たちが新生し、新しいいのちが与えられると、それまでとは違って、朽ちゆくものではなく、永遠のもの、天にあるものを求めるようになる。



荒野でマナを拾い集める

(5) 「マナ」と「いのちのパン」との対比

ユダヤ人の質問に対して、主は次のように答えておられる。

《まことに、まことに、あなたがたに言います。モーセがあなたがたに天からのパンを与えたのではありません。わたしの父が、あなたがたに天からのまことのパンを与えてくださるのです。神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものなのです》

主はモーセの時の「マナ」と、今、父なる神が与えようとしておられる「いのちのパン」とを対比して説明しておられる。

第1のことは、モーセの時に与えられたマナは、モーセが与えたものではなく、天の父なる神が与えたものであるということである。

第2は、マナは確かに肉体の食物とはなつたが、それはいのちの食物ではなかつた。しかし、今、父なる神がお与えになるパンは、「天からのまことのパン」であり、「神のパン」である。それは、父なる神が天から遣わされた御子イエス・キリストご自身にほかならない。イスラエルのためだけでなく、世に、全世界に与えるものである。

(6) そのパンをいつも私たちに与えてください

聴衆は、主がお語りになったことがよく分からなかつた。だから、「主よ、そのパンをいつも私たちに与えてください」と言っている。これは、ちょうど、主が「いのちの水」について語られた時、それを聞いていたサマリアの女が、「主よ、私が渴くことのないように、ここに汲みに来なくてもよいように、その水を私に下さい」と言っているのと同様である。

彼らだけを笑うことはできない。私たちもしばしば霊的視力が劣っている時、霊的世界のすばらしさが見えず、主の御言葉を理解できないことがある。いつも神の御前にへりくだって、主のご人格と主の救いのみわざが見えるように祈り求めよう。